
幸福の雫

金弘 美樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸福の雪

【Zコード】

Z5748G

【作者名】

金弘 美樹

【あらすじ】

再掲載です。かなり大人な高佐ストーリーです。佐藤さん目線で
高木くんへの想いを綴つてみました。

(前書き)

先般諸事情により削除させていただいた作品を再掲載させていただきました。ご迷惑をおかけして申し訳ありません。この作品は直接的な表現は出来るだけ避けていますが、かなり大人な内容に仕上がっていますので、一応15禁という自主規制をかけさせて頂きました。そういうのが苦手な方、そういう設定が許せないという方はご注意ください。

バスタオルで髪を拭きながらビングのドアを開けると、先程までスポーツニュースを觀いていた筈の彼の姿が無い。相変わらずテレビはついたまま。きょろきょろと辺りを見回しながら中に入ると、長身の彼は窮屈なソファに身体を預け、すやすやと寝息をたてていた。普段は歳相応に見える彼だけど、寝顔はまるで少年のようにあどけない。無防備なその寝顔に思わず笑みが零れた。

可愛い顔しかやつて

器用に身体を丸めて眠るその姿はまるで犬のようだ。床にぺたりと座り込んで、まじまじとその寝顔を見つめる。起こしてしまわぬよう気をつけながら、そつとその前髪を梳く。

ほんと、可愛いんだから

先程ちらりと覗かせた情熱的で我が儘な彼なんて微塵も感じさせない愛らしい寝顔。

- 続きはお風呂の後で、ね -

名残惜しそうな彼の腕の中から抜け出し浴室へ向かったのはほんの數十分前。よほど疲れていたのか、待ち切れずに眠ってしまったらしい。

「今日はおあずけね。」

唇の端に微かな苦笑を浮かべて彼の耳元にそっと囁く。期待していた訳では無いのに、少しばかりがっかりしている自分に気付いて思わず自嘲ぎみな笑みが漏れた。

「んー・・・美・・・和・・・」

不意に彼の唇が動く。突然名前を呼ばれて心臓がきゅんと甘く疼いた。起こしてしまったのかと思って慌てて手を引っ込める。しかし、彼はまだ目をつぶつたままだ。

寝言、か

小さな溜め息が漏れる。再びそうっと手を伸ばし、彼の髪を撫でる。

いつたいどんな夢を見てるのかしら

幸せそうな彼の寝顔にささやかな苦笑を浮かべながら、指先でその頬に触れる。

「美和・・・・」

先程よりもややはつきりした声で、彼が私を呼ぶ。相変わらず彼が目を覚ます気配は無い。私はふと気付く。彼が特別な呼び方で私を呼んだ事に。彼は普段例え一人きりの時でも決して私の事を呼び捨てでは呼ばない。そう。あの時以外は。彼が私を美和と呼ぶのは、あの時だけと決まっているのだ。

「もうつ。何の夢見てんのよ。馬鹿つ。」

たちまち頬がかあつと熱くなり、一気に恥ずかしさが込み上げてくる。無防備な顔で眠る彼の鼻を親指と人差し指で思いつきり摘み上げる。

「ううつ」

僅かに声を漏らし、彼が眉をしかめる。苦しそうに首を振り、身体をよじると、

「！－！」

声にならない声を上げて、がばっと跳ね起きる。

「はれ？ 美和子さん？」

不思議顔で辺りを見回した彼が視界の端に私をどうえ、怪訝な顔で

呼ぶ。

「今、変な夢見てたでしょ。」

少し怖い顔で彼に詰め寄ると、

「へつ?」「

間抜けな声を漏らした後で、まだ少し寝ぼけ眼の彼は首を捻り、はたと何かに思い当たつて狼狽する。

「もう知らないつ。」

口を尖らせてぷいっとそっぽを向く私に、彼は慌てて手を伸ばす。「わあっ。」「

バランスを崩し、短い悲鳴を上げた彼の身体がソファから降つてくる。一瞬の出来事に、膝を崩して床に座り込んでいた私は逃げる間もなく彼の下敷きになつた。

「つたくもうつ。痛いじやないつ。」

低い声で文句を言いながら顔を上げると、すぐ目の前に彼の顔があつた。目が合つて、一気に鼓動が跳ね上がる。

「あ、すみません。」

謝りはしたもの、彼はじつに退けようとはしない。じいっと覗き込んでくる彼から視線を逸らしながら、胸の高鳴りを悟られまいようぶつきらぼうに咳く。

「早く退けなさいよ。重いじやない。」

出来るだけ素つ氣なく言つたつもりだったのに、その声は自分でもはつきりと判るくらい上擦っていた。

「ヤです。」

彼はきつぱりと答えた。先程眠りにつく前に見せたあの我が儘な顔の彼が私を見下ろしている。

「美和子さん、さつき言いましたよね。続きは後でつて。」

真剣な表情で問い合わせてくる彼から田中が離せない。鼓動はますます速くなる。

「そ、そんな事言つたかしら。」

引き攣つた笑みを浮かべる私を見下ろしたまま、彼はにやりと悪戯

つぱく笑う。

「言いましたよ。」

答えが返ってくるのと同時に彼の温もりがそつと唇に触れた。

「そうだったかしら。それ、渉くんの……」

勘違いなんぢやない?と続けるよりも早く、彼の唇が言い訳しようとする私の唇を塞いだ。自分でも信じられないくらい甘い吐息が唇の端から零れ落ち、頭の中が真っ白になる。身体の芯に火をつけられたような気がした。

「駄目ですか?」

彼が困ったような笑顔を浮かべて耳元で囁く。心臓はもう爆発寸前だった。

「聞かないでよ。馬鹿。」

氣恥ずかしくて、つい素っ気ない口調になってしまつ私に彼は穏やかな笑顔を向け、優しく髪を梳ぐ。彼の柔らかな唇が再び私の唇を塞ぎ、私はうつとりと瞳を閉じた。情熱的な彼に身も心も支配されていく。でもそうされる事は決して不快ではなく、寧ろ心地良さえ感じる。悔しいけれど、なんだかんだ言つて結局私は彼に愛される事を望んでいるのだ。彼に愛され、共に生きる事を切望している。五感の全てで彼を感じ、彼の愛を感じる事で私の心は満たされるのだ。

触れた肌の温もりも。讐言のように繰り返し呼ばれる名前も。耳元で何度も囁かれる愛の言葉も。全てが堪らなく愛おしくて泣きそうになる。

「美和……愛してる。」

少し掠れた優しい声に小さく頷いて、幸せを噛み締める。繋いだ手の温もりが、殺伐とした世界を生きる私に安息と幸福を与えてくれる。

「私も。渉……愛してるわ。」

そう言って微笑った私の瞳から、幸福の雫はとめどなく零れ落ちた。

(後書き)

先日諸々の事情で削除させていただいたこの作品を、いろいろな方から背中を押していただき再度掲載させていただく運びとなりました。読者の皆様には大変なご迷惑をおかけしてしまい申し訳ありません。また、今回の件で前回掲載時に感想を下さっていた方々には特にご迷惑をおかけし、不快な思いをさせてしましましたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。この度は私の勝手な判断でご迷惑をおかけしてしまい大変申し訳ございませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5748g/>

幸福の雫

2010年10月28日03時01分発行